

自然教育園に関する文献目録 (2)

各論：動物に関する文献 (1)

千 羽 晋 示*

Bibliography on the National Park for Nature Study (2)

Animals (1)

Shinji Chiba

こん虫類・鳥類・その他の動物にわけて列記する。

(1) こん虫類関係

- (1) 文部省科学教育局 (1949) 国立自然教育園概説 文部省科学教育局 25~31頁
ガイドブックとして出版されたものであるが、蝶類、蛾類など、特筆される種についての記載がある。
- (2) 文民教育協会 (1950) 課外教室叢書 自然園教室 小山書店 3~15頁
自然教育園を対象に、四季の観察のポイントを記述してあるもので、若葉と昆虫 (春)、水生昆虫など (夏)、昆虫の冬越し (秋・冬) などについて記している。
その他の動物についても記されている。
- (3) 国立自然教育園 (1952) 国立自然教育園動物目録第1集 昆虫綱 国立自然教育園基礎資料第1号 1~42頁 <自然教育園報告第9号 (1979) 88頁参照>
- (4) 国立自然教育園 (1955) 国立自然教育園内産にくばえ類について 同第5号 1~16頁 (ガリ版)
<自然教育園報告第9号 (1979) 88頁参照>
- (5) 中村方子他 (1966) 森林における落葉の消失と土壤無脊椎動物について 自然教育園の生物群集に関する報告第1集 財団法人野外自然博物館後援会 99~118頁
土壤動物の現存量、落葉と摂食量との関係の調査結果である。
土壤無脊椎動物は、3月のコナラ林で42匹, 564 mg ($\frac{1}{4}\text{m}^2$), 湿生草原で543匹, 7,793 mg ($\frac{1}{4}\text{m}^2$) で、比較的小型の土壤動物が存在していたこと、また、落葉の摂食などによる重量の減少はいちぢるしいが、土壤の発達の状態は、きわめて悪かった。
- (6) 黒佐和義 (1966) 自然教育園で得られた土壤昆虫について、同上報告 120~123頁
アオゴミムシの一種、ヒメナガゴメツキ (?) といった再検討を要する種のみられたこと、また数種のリストがある。

* 国立科学博物館付属自然教育園, National Park for Nature Study, National Science Museum

- (7) 近藤正樹(1966) 自然教育園の林内に生息するアリ 同上報告 129~130頁
東京の平地林では普通にみられる3亜科, 6種を記している。
- (8) 岡田豊日(1966) 自然教育園のショウジョウバエ 同上報告 131~132頁
35種のリストに, 採集期日を付記してある。
- (9) 久居宣夫(1972) 自然教育園の潜葉虫について 自然教育園報告第3号 23~26頁
1971年に大発生したスダジイの潜葉虫(ハモグリガの一種の幼虫)の特異な生活史を記し, このガの大発生がスダジイの枝の枯死に大きく関与していることを記している。
- (10) 桜井信夫他(1972) 自然教育園の蝶類について 同上報告 27~33頁
1952年に49種生息していた蝶類が, 1972年には35種に減少したこと, その原因として, 自然教育園内外の環境が, いちぢるしく変化したことがあげられることを記している。
- (11) 久居宣夫(1972) 都市環境における昆虫の多数発生について 都市生態系の特性(1972) 38~44頁
潜葉虫によるスダジイ葉の食害葉頻度について, 自然教育園および千葉県の3地域, 八王子市城山での比較調査結果をのべ, 一葉あたりの幼虫の個体数の上限などについても記している。
- (12) 久居宣夫(1974) 都市における異常発生昆虫 とくにモグリチビガ科の一種について 同上報告(1974) 59~72頁
モグリチビガの一種の都内分布を調査し, 自然教育園をはじめ森林植生が小面積の点として残存している地域で大発生していること, 都市では潜葉性の昆虫が増加傾向にあることをのべ, 大発生が自然環境の残存と密接な関係にあることを指摘している。
- (13) 桜井信夫(1974) 東京における腐肉に集まるこん虫と森林植生の量との関係 同上報告(1974) 47~58頁
都下のベート・トラップ調査の結果から, 地域の自然度的なランク付けをこころみ, 腐肉誘引性のこん虫と森林植生の量の関係を明らかにしている。その中で自然教育園の位置づけをした。
- (14) 矢野 亮(1974) 異常発生した2種の昆虫がスダジイ林に及ぼす影響 同上報告(1974) 73~82頁
自然教育園に発生したルリイクビチョッキリとモグリチビガによって, スダジイが正常な落葉期より1か月早く落葉する。
これらのことが自然教育園のスダジイの樹勢をよわめる結果になっているのではないかと推論している。
- (15) 矢野 亮(1974) ルリイクビチョッキリの生態 同上報告(1974) 83~92頁
ルリイクビチョッキリの生活史(成長, 摂食量, 体重など)解明するとともに, 発生の要因, 年変動を考察している。
- (16) 大野正男(1974) 都市環境下におけるハムシ科甲虫の分布 同上報告(1974) 93~129頁
自然度を評価する方法として, クモ, ハムシ指数をつかい考察している。
この中で, 自然教育園の自然度の高いことがのべられている。
- (17) 大野正男(1975) 都市の動物に関する文献 同上報告(1975) 135~140頁
全国の都市の動物についての文献が記されており, その中に自然教育園に関するものも含まれている。
- (18) 矢野 亮(1973) 新しい虫たちの登場 自然科学と博物館 40巻 2号 79~82頁
ルリイクビチョッキリ, モグリチビガの一種の生活史と, それらがおよぼす影響について, わかりやすく解説している。
- (19) 久居宣夫(1975) 都市環境下における *Nepticula* sp. の大発生機構の解析(1) 都市生態系の構造と

動態(1975) 129~136頁

都内各所で大発生しているモグリチビガの発生量が、どのような機構でさまるのかを、自然教育園を例に追跡した。

20 頼 惟勤(1978) 自然教育園の蜻蛉の目撃記録 自然教育園報告第8号 60~71頁

自然教育園産トンボの目録。41種(未見8種を含む)について、記録期日、数、園内の観察場所を記し、若干の生態について記してある。

21 久居宣夫(1979) 潜葉性小蛾類の生活史(予報) 同上報告第9号 25~32頁

常緑性の植物に潜葉する *Nepticula castanopsiella*, *Tischeria* sp., *Gracilarutidae* sp., *Heliozela* sp. の4種の生活史などについて記している。

(2) 鳥 類 関 係

(1) 文部省科学教育局(1949) 国立自然教育園概説 文部省科学教育局 (前述)

(2) 中西悟堂(1949) 自然教育園の鳥目録 野鳥14巻 5号 24頁

(3) 中西悟堂監修(1950) 国立自然教育園の野鳥, 春夏の鳥の部, 冬の鳥の部 国立自然教育園(ガリ版)

(4) 中西悟堂(1951) 自然教育園の鳥目録 野鳥16巻 3号 24~25頁

(5) 黒田長礼監修(1954) A List of Animals in the National Garden for Nature Study, Series 2nd, Aves (Preliminary Report) (ガリ版)

(6) 文部省国立自然教育園(1974) 国立自然教育園動物目録第2集 鳥綱 国立自然教育園基礎資料第2号 1~4頁

(7) 鶴田総一郎(1954) 国立自然教育園の開設 鳥13号 72~77頁

(8) 鶴田総一郎他(1966) 自然教育園の鳥類について 自然教育園の生物群集に関する調査報告第1集 財団法人野外自然博物館後援会 80~93頁

(9) 千羽晋示(1969) 自然教育園の鳥類群集について 自然教育園報告第1号 1~13頁

(10) 千羽晋示(1972) 環境変化と鳥類群集 都市生態系の特性(1972) 33~37頁

(11) 桜井信夫(1972) 東京都23区内の2・3の緑地における繁殖鳥類の年変化について 同上報告(1972) 83~96頁

(12) 桜井信夫(1972) 自然教育園におけるシジュウカラの繁殖個体数の変動について(中間報告) 自然教育園報告第3号 17~21頁

(13) 千羽晋示(1973) 動物の生息環境の変化と退行現象 自然科学と博物館 40巻2号 69~73頁

(14) 桜井信夫(1973) 東京の鳥の話 同上報告 40巻2号 65~68頁

(15) 桜井信夫(1973) 東京23区内におけるシジュウカラの繁殖状況について 都市生態系の特性(1973) 123~138頁

(16) Sakurai N. (1973) Varieties of birds that breed in the heart of Tokyo metropolis and breeding condition of Japanese Great Tit Studies in Urban Ecosystem (1973) 29~40pp.

(17) 桜井信夫(1974) 東京都心部におけるシジュウカラの繁殖状況と森林植生の関係について 都市生態系の特性(1974) 129~136頁

(18) 千羽晋示(1974) 環境変化と動物群集 同上報告(1974) 27~46頁

(19) Chiba S. (1974) Environmental transitions and community of animals Studies in Urban Ecosystem (1974) 46~64pp.

⑳ Chiba S. (1974) Indices of Urban environments in relation to aves and animals Studies in Urban Ecosystem (1974) 65~72pp.

㉑ 科学技術庁資源調査所 (1971) 自然教育園生物相15年間の比較 都市環境保全第23号

㉒ 千羽晋示 (1978) 自然教育園の鳥類について 自然教育園報告第8号 73~97頁

これまでの自然教育園の鳥類に関する調査、資料などの経緯を記すとともに、これまでの記録種33科 98種についての目録と主な確認記録を付した。

また、全種についての、これまでの個体数の変動について考察してある。

鳥類関係の(1)~(21)については、(22)に記してあるため、ここでは省いた。

(3) その他の動物

(1) 文部省国立自然教育園 (1953) 国立自然教育園内産軟体動物(腹足綱・柄眼目)目録 (ガリ版) 7科 12種の記載がある。

(2) 高島春雄 (1950・'51) 自然教育園のクモ Acta Arachnologica 12巻, 1/2, 3/4号
2回にわたり、計48種の種名の記載のみしてある。

(3) 今泉吉典他 (1966) 自然教育園のモグラについて 自然教育園生物群集に関する調査報告第1集 財団法人野外自然博物館後援会 77頁
アズマモグラのみが採集され、分布について記されている。

(4) 矢部辰男 (1966) 自然教育園におけるネズミ類について 同上報告第1集 78頁
ホンダアカネズミの捕獲の記録。コナラ林、サンショウウオ沢周辺には生息しないと推定した。

(5) 野口 惇 (1966) 自然教育園のヒキガエル個体群について 同上報告第1集 94~98頁
個体識別による記号放逐法を使用し、ヒキガエル個体群の年令構成、園内の分布を考察し、個体数約600個体を算出した。

(6) 一戸 稔 (1966) 自然教育園の土壤線虫 同上報告第1号 119頁
Mononchus sp. Dorylaimus sp. を記録。いずれも線虫を捕食する線虫。

(7) 篠原圭三郎 (1966) 自然教育園の多足類 同上報告第1号 124~128頁
ナガスジムカデ科、ツチムカデ科など9科、16種を記載し、植生と生息種、地理的分布、前回調査との比較などについて記してある。

(8) 今立源太郎 (1966) 自然教育園の原尾目及び粘管目 同上報告第1集 133頁
10科、18種を記載してある。

(9) 波部忠重 (1966) 自然教育園の貝類 同上報告第1集 135~136頁
6科、8種を記載してある。植生別採集リストも加えられている。

(10) 安立綱光・大野正男 (1966) 自然教育園のミミズ 同上報告第1集 136頁
13種を記載しているが、内3種は新種の可能性があるとしている。

(11) 山岸 宏 (1966) 自然教育園内の池沼の底生動物とプランクトンについて 同上報告第1集 137~140頁

園内水域の溶存酸素量、pH、底生動物、プランクトンについて、地域別の結果を記している。

(12) 大野正男 (1973) 東京都区内における土壤動物の分布(1) 都市生態系の特性 (1973) 139~156頁
東京都区内35地点を対象に地表性の土壤動物、とくにフトミミズの分布について調査し、ミミズの天敵との関係などについてもふれている。

これら調査地の1つとして、自然教育園が対象となっている。

(13) 山川 守・久居宣夫(1975) 自然教育園内の真正蜘蛛類 自然教育園報告第6号 33~35頁
23科, 98種を記載し, 150~180種は生息するものと推定している。

(14) 金森正臣(1975) ヒキガエルの生態学的研究 (I)個体数の推定 同上報告第6号 1~8頁
自然教育園ヒキガエル生態研究グループによる一連の報告の1つ。

記号放逐法による2年間(1973・'74)の結果として, 1973年5~7月に200~350個体が路上で観られ,
10~11月には1,000~2,700個体, 1974年10月には, 約1,000個体と推定した。

(15) 久居宣夫(1975) ヒキガエルの生態学的研究 (II)ヒキガエルの成長 同上報告第6号 9~20頁
一連の報告の1つ。体重分布, 成長(相対成長), 性成熟などについて考察してある。

(16) 矢野 亮(1978) ヒキガエルの生態学的研究 (III)ヒキガエルの行動 同上報告第8号 107~120
頁

一連の報告の1つ。記号放逐により, 個体の行動域, 行動域の決定する時期, 産卵期の行動などについて
考察を記してある。

(17) 千羽晋示(1978) ヒキガエルの生態学的研究 (IV)発信器着装による行動軌跡 同上報告第8号
121~134頁

一連の報告の1つ。テレメトリーによる同一個体の日行動範囲, 季節変化, 隣接個体との関係について調
査し, 予報的考察を記してある。

(18) 久居宣夫・菅原十一(1978) ヒキガエルの生態学的研究 (V)繁殖期における出現と気象条件との
関係について 同上報告第8号 135~149頁

一連の報告の1つ。1974~1977年の4年間の調査結果から, 繁殖行動と気象要因との関係を考察している。
繁殖個体の出現日と気象要因との間には, 最低温度の上昇が関与しており, 深さ5cmの最低地温が6°C
以上になると出現する傾向があるなどを推論している。

(19) 大野正男(1976) 都市環境下におけるクモ類, とくにジョロウグモの分布 都市生態系の構造と動
態(1976) 135~154頁

都市の環境指標の1つとしてジョロウグモをとりあげ都内35地点での結果を記してある。

この中の対象地に自然教育園もえらばれている。

(20) 泰野晴美(1979) 水鳥の沼に出現した原生動物およびその他の微小動物 自然教育園報告第9号
75~81頁

1978年におこなった水鳥の沼での採集目録。